

MOUNT ZINE  
12,13 出品作

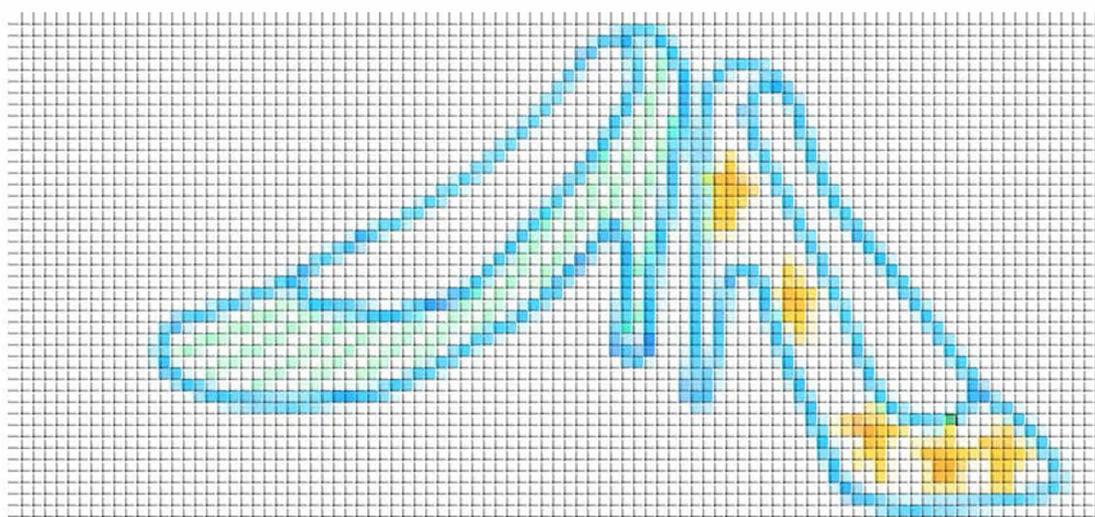
In her shoe

(イン・ハー・シュー)

written and illustrated

by Miki Hiraoka

文章・イラスト 比良岡美紀



<タイトルについて>

-In her shoe-

In someone's shoes という表現には、誰かの立場になってみるという意味があります。

2005年公開のアメリカ映画のタイトルが『In Her Shoes (イン・ハー・シューズ)』でしたが、shoe にすることで片足だけ彼女の靴に入れてみる(少しだけ彼女の立場になってみる)という意味を込めたつもりです。

参考：

☆アルク英辞郎 on the WEB in someone's shoes

<http://eow.alc.co.jp/in+someone's+shoes/UTF-8>

☆Wikipedia 『イン・ハー・シューズ』

<https://ja.wikipedia.org/wiki/イン・ハー・シューズ>

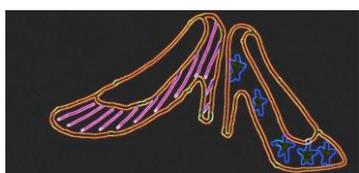
## 序

彼女の靴を履いてみよう。そう思ったのは、彼女の考えていることを少しでも理解したかったからだ。半ばすぎるような気持ちだった。結論から言うと、何もわからなかった。そもそも、僕が履けるような靴を彼女は持っていなかった。

だからといって、彼女は僕に理解されるのを拒んでいたと言うつもりはない。もちろん、本当のところはわからないけれど。

僕はどうかだろう。彼女に理解されようとしていただろうか。あるいは、彼女を理解しようとしていただろうか。

彼女がいなくなってから、ともに過ごした日々を思い返しては、何がいけなかったのかを考えている。でもそれは、彼女を理解するのに本当に役立つのだろうか。僕にはわからない。僕にはもう、何もわからないのだ。



彼女がいなくなったのは三週間前。彼女とは僕の妻だ。

結婚して五年になる。最初の二年はとても仲がよかった。「仲がいい」といえる友達を持たない僕にも、二人は仲がよいのだと思えるくらいに。それから三年は、仲がいいと言えないときもあったが、仲が悪いというほどでもなかった。

仲のよさが薄れはじめた三年前、僕は勤めをやめた。妻と同じ会社に結婚後も勤めていたが（妻とは職場結婚だった）、親会社が吸収合併されてリストラの噂が流れ、みんな仕事どころではなくなっていったし、父の遺産でしばらく暮らせるめどが立ったのを機に、思い切って退職することにした。

僕が退職したあと、早期退職制度ができたことを知った。でも損をしたとは思わなかった。それは妻も同じで、僕が退職するときも、妻は反対も賛成もしなかった。あなたの好きにしたらいいわと言うので、好きにさせてもらった。

一年ほどは、問題らしきものは何もなかった。あるいは僕が気づかなかっただけかもしれない。でも

ここ二年ほどは鈍感な僕にもわかるほど仲が悪くなっていた。週に何度も言い合いをした。いなくなる前の晩もだ。正直に言おう。かつてないほど険悪で、派手な喧嘩だった。

原因は、ここ二年ほど二人で話し合い、そのたびに結論を先送りしてきたこと。具体的には、子供を持つかどうか。妻は子供をほしがっていた。僕はといえば、子供は好きでも嫌いでもない。だから妻の気持ちがよくわからなかった。それに、もう三十歳だから不妊治療をすると妻は言ったが、まだ三十歳で不妊治療というのは納得がいかなかった。

いや、問題は年齢ではない。たぶん妻が何歳でも、不妊治療には気が進まなかっただろう。そこまでして子供を持つ必要があるのかと思ったし、もしできなかつたらと考えるのが怖かった。

この問題について話すとき、いつも妻は冷静だった。でもいなくなる前の晩は、次第に感情が抑えきれなくなったのか、目に涙を浮かべ、ほとんど叫ぶように僕に懇願した。

お願いだから子供を産ませて。どうしてもお母さんになりたいの。妻はそう言った。

どうしてもお母さんになりたいとはどういうことだろう。誰の子供でもいいのか？

ふとよぎったその思いを口にすると、妻は顔を真っ赤にして叫んだ。

「よくもそんなデリカシーのないことが言えるわね！」

たしかにそうかもしれないが、物事に絶対はない。どうしても叶わないことはいくらでもある。その可能性をまったく考えていないのが気になった。

普段なら、妻は僕の意見を受け入れてくれただろう。でもあの晩は無理だった。感情をぶつけ合い、傷つけ合うことに耐えられなくなった僕は一人床についた。その頃は寝室を別にしていて（それなのに子供がほしいというのも理解できないのだが）、一人で眠りについた。そして翌朝目覚めると、妻はいなくなっていた。

それから三週間。連絡もなく、夜のあいだに帰っている気配もない。どこでどうしているのか、皆目見当もつかない。壁の時計を見る。夜の十時をまわったところだ。今日はもう何もないだろう。着替えて寝ようと思い、テーブルに置いていた携帯電話をポケットに入れたとき、電話のベルが鳴った。

びくっとして、携帯電話の感触を確かめた。違う、家の電話だ。

立ち上がり、電話のところへ歩いていった。

歩を進めるたび、心臓の鼓動が大きくなる。なぜ携帯電話じゃないんだ。料金が高いからか？

いや、それより——なんと言おう。帰ってきてくれと頼むのがいいか？ それとも——。

発信者番号はなく、非通知と表示されている。本当に妻だろうか。

いぶかしんでいる間に、電話は鳴りやんだ。

後悔とも、安堵ともつかない気持ちだが、胸の中に広がっていく。気がつくくと、脇にびっしりと汗をかいていた。

パジャマに着替え、ベッドに横になる。思わず深いため息が出た。

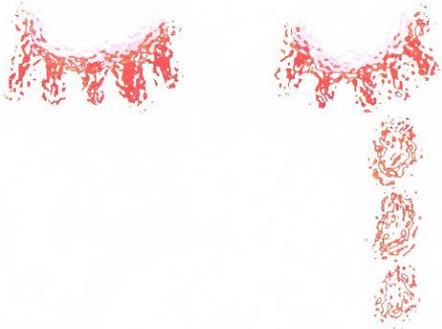
それで思い出したのだが、一度だけ検査のために病院へ行ったことがある。どうしても妻が言うので、検査するだけならと、重い腰を上げて出かけたのだった。

どこの病院かは忘れたが、廊下で待っているあいだ、ひどく心細かったのを覚えている。そこにいる誰もが、僕を責めているように思われた。楽しげに話しながら通りがかった女性たちも、僕が顔を上げ

ると話をやめた。そして僕の前を通り過ぎると、また話を始めるのだ。僕のことを話しているに違いないと思った。

検査の結果、特段の問題はないと言われたけれど、もう二度と病院へは行きたくなかった。妻は最初、僕の気持ちを理解してくれているようだったが、やがてもっと積極的になってほしいと言い出した。

僕としては、一度病院に行っただけでも十分積極的になったつもりだった。あのとときの不安や情けなさ、その他もろもろの感情を二度と味わいたくなかった。それで今はまだ、とか、まあそのうち、とか、のらりくらりと追及をかわしていたのだが、ついに妻も堪忍袋の緒が切れたのだろう。あの晩の喧嘩は、起こるべくして起こったのだと思う。



ピンポーン、とインターホンが鳴った。枕もとの時計を見る。まだ朝の八時をまわったところだ。ドンドン、と玄関をたたく音がした。

「山口さん、わたしです、田丸です」

「田丸さん？」

田丸さんは町内会の人で、なにかと僕たちのことを気にかけて、ときどき顔を見せてくれている。町内会費のことも、避難訓練（最近は避難所の運営訓練もある）についても田丸さんから教えてもらった。急いで玄関を開けると、田丸さんは笑顔になった。

「よかった、お元気そうで。その後、いかがかなと思ったの」

「どうも、ご親切にありがとうございます。すみませんご心配おかけして」

「いいのよ。奥様があんなことになって、まだひと月も経ってないんだし」

「その節はお世話になりました」

「そんな、よして。元気ならそれでいいの。朝早くごめんなさい。また来るわね」

「おかまいもしませんで」

「いいのよ。じゃあね」

田丸さんは時折振り向きながらマンションの廊下を歩いていった。ちょうどエレベーターが着いたところで、田丸さんは小さく手を振って吸い込まれていった。エレベーターを降りてきた人物と、すれ違わずに軽く会釈をかわしたあと、僕はドアを閉め、小さくため息をついた。

妻がいなくなったあと、田丸さんと会う約束があったので一人で出向いたところ、妻がいないことを見とがめられ、問われるまますべて話してしまった。最初こそ心配そうだったものの、次第に興味が増してきたのが僕にもわかった。世話になった人のことを、こんな風に言うべきでないのはわかっている。でも、僕と妻のあいだのことは田丸さんには関係ない。一度はつきりそう言ったら、それ以来、少し距離をおいてくれるようになった。どれほどありがたいかかったことか！

ただ、欲を言えばもう少し距離を取ってほしい。顔を見に寄ったというのも半分は本当だろうが、も

う半分は、妻が戻っているか確かめたかったのだろう。戻ったら二人でご挨拶にうかがいます、とこの前も言ったのに――。

「仕方ないか」

声に出してみると、本当に仕方ないような気がしてきた。そう、仕方ない。他人を変えることはできないのだ。自分の行動・考え方さえ変えられないのに、どうして他人を変えられる？

居間へ戻ろうとしたとき、ドアをたたく音がした。

「またか」

もつとはつきり、来ないでくれと言うべきかもしれない。

「あれ？」

誰もいない。廊下に出て左右を見まわしたが、人の姿はなかった。

「たちの悪いイタズラか」

戻ろうとして、右くるぶしにかすかな違和感を覚えた。

下を見ると、ふわふわした毛玉が踵のあたりにくっついていて。態勢を変え、しゃがみこんで拾い上げようとした瞬間、毛玉がにゃあ、と鳴いた。

「なんだお前か」

毛が伸びていてわからなかったが、二か月ほど前、妻が譲渡会でもらってきた猫だ。外見は変わっているがおそらくそうだろう。近所で開かれた譲渡会に、妻が出かけてひと目ぼれ。連れて帰ったこの猫を、妻はとても可愛がっていた。

「久しぶりだな、どこで何してた」

猫は首をかしげ、僕を見て「にゃあ」と鳴いた。

「聞いても無駄か」

僕は猫を抱え上げ、居間に放した。猫は勢いよく飛び降りて、居間を一周したあと、何かを催促するようにまた「にゃあ」と鳴いた。

「全部片づけたんだよ。お前が出ていったから」

なんとなく妻に言ったような気がして、猫をまじまじと見る。ひよつとしてこの猫が？ まさか。

「どうかしてるな俺は」

本当にどうかしている。ただの猫だ。

それ以上妻のことを考えまいと、猫のトイレや爪とぎ用の板、それに導入予定だったキャットタワーなどをクローゼットから引っ張り出した。ケージを設置すると、猫はおとなしく中に入った。水と餌の皿はベランダで植物の水やりに使っていたのを思い出し、代わりに別の皿を持ってベランダに出る。いい天気だった。見渡すかぎり、雲ひとつない。いつもは見えない富士山が、初めてくっきり見えた。

雪をいただく富士山の写真を、部屋の内見で見せられたのを思い出す。それを見て、妻はこの部屋がいいと言ったのだ。出ていくまでの八年間、妻は一度も富士山を見られなかったけれど。

「にゃあ」

皿を取り落としそうになったが持ち直し、ベランダを出て台所へ向かう。

「おどかすなよ、びっくりするだろ」

猫は鳴きながら僕のあとをついてくる。ケージにいると思ったのに。油断していた。

台所で二つの皿を洗い、ふきんで丁寧に拭いてからケージに設置した。片方に水を注ぐ。猫の餌は、どこへやっただろう。クローゼットにはなかった。もう一度台所へ戻る。食品ストックのあるあたりを探したが、餌は見当たらない。

「買わないとだめか」

振り向くと猫がきちんと正座していて（そのように見えた、ということだが）、僕の顔を見て「にゃあ」と鳴いた。そして、お世話になりますと言いたげに頭を下げ、ケージへ戻っていった。



商店街に来るのは久しぶりだった。実のところ、マンションを出たのも何日ぶりかというくらい外に出していない。カップラーメンやレトルト食品でしのいでいたが、ついにすべての在庫が底をつき、今朝食べるものもなくなっていた。そのことをすっかり忘れていたのだ。

歩きだしたとたん、お腹がぐうと鳴ったが、まだ朝の九時にもなっていない。コンビニで何か買って帰るか、いちばん手近な店に入ると、イトインコーナーがあった。そうだ、最近買ったものをすぐ食べられるんだ。でも家で猫が待っているし、やはり買って帰ろう。

朝食用のおにぎりと、昼食用の弁当をかごに入れる。おにぎりだけでは寂しい気がして、カウンターでおでんを頼んだ。それを入れてもらっている間に、猫の餌を探しに戻る。自分で買っていなかったせいもあるのだが、猫の餌が何種類もあって驚いた。カウンターに声をかけ、猫の外見を伝え、どの餌がいいかを尋ねる。

「以前に使われていた商品などおわかりになりますか」

「いや、それがわからなくて」

「好き嫌いなどはありますでしょうか」

「たぶんないと思いますが」

それでしたら、と店員が指し示したものを数個かごに入れ、レジに並んだ。会計をすませ、忘れずにおでんも入れてもらう。これでとりあえず、昼まではしのげるな。午後から散歩がてら、少し離れたスーパーへ買い出しに行こうと決めた。

戻ると、猫はケージの中で横たわっていた。手を洗い、買ったばかりの餌を開けて皿に出す。と、猫がむくつと起き上がり、嬉しそうに食べはじめた。

「よかった」

ホツとしたらまたお腹が鳴った。台所でやかんに水を入れ、火にかける。温かいお茶が飲みたかった。そういえばインスタント味噌汁が残っていたはずだと思い出し、ストック棚をあさる。

「あった！」

一つだけ残っている。賞味期限は三日後。ぎりぎりセーフだ。スーパーへ行ったら味噌汁も忘れずに買おう。

おにぎりとおでんの食事をしながら、取ってきた新聞を読んだ。世の中は相変わらずだ。妻がいなくなっても、いなくなった猫が戻ってきてても、何も変わらない。

「そういえばお前、ずいぶん毛が伸びたな。美容院でも行くか」  
猫を見ると、食べ終えてまた横になっている。

「食べてすぐ寝ると牛になるぞ」

猫が牛になるのを想像したら、ちよつとだけ愉快的な気持ちになった。猫は無言で横たわったまま。僕は小さくため息をつき、食事に戻った。

あの猫だというたしかな証拠はない。それでも僕には確信があった。二か月前、譲渡会でもらい受けた猫は、ひと月ほどで姿を消していた。

譲渡会には二人で出かける予定だったが、急な用事が入り、妻が一人で行った。帰宅してみると下駄

箱の戸は開けっ放し、廊下には物が散乱し、さらには居間の食器棚が倒れていた。動転して妻の名を呼ぶと、台所から妻が顔を出した。

「おかえりなさい、早かったのね」

「それよりこれ、どうしたの」

「これって？」

「ずいぶん散らかってるし、何かあったのかと思って」

「ああ、そういうこと」

妻は笑った。

「何がおかしいんだ、心配しているのに」

大丈夫よ、と妻はなだめるように言って、事情を説明してくれた。

もらい受けた猫は災害で飼い主を失っていた。災害が起きると、人間への支援が優先され、動物たちは後回しにされる。心細い状況で過ごしていたことに加え、引き取られるたびに何らかの事情で戻され、

何度も環境の変化を経験した。猫は環境の変化を嫌う動物だ。もともとの温和な性格がすっかり影を潜め、団体の人たちも手を焼くほどになってしまったそうさ。

「ここへ着いたとたん、暴れまわって大変だったの。やっぱり不安だったんだと思う」  
僕はあらためて周囲を見まわした。苦労しそうだというのは話を聞いてわかったけれど、いまひとつ実感がわかない。これをすべて、本当に猫がやったのか？

「たぶん信じられないと思うけど」

「え、あ、うん。そうだね」

妻はもう一度笑って、手招きをした。

「とりあえず、落ち着いたみたい。来て。ミルク飲んでるよ」

散乱した物をよけながら、台所へ行くと、猫がぴちゃぴちゃと音を立てていた。

「すごい勢いだね」

「でしょう？ お腹がすいてたんだなあって」



「それもあるかもしれないけど」

妻はちよつと首をかしげて僕を見た。

「きみのことを信頼したんじゃないかな」

妻は一瞬、驚いた顔をして、なあに、どうしたのお世辞なんて、と嬉しそうに言った。

「お世辞じゃないさ。本当に、そう思ったから」

「わかってる。ありがとう」

妻はしゃがみ込み、猫をいとおしそうに見つめていた。

それから一か月ほど、猫と僕と妻、二人と一匹でうまくやっていたと思う。でも一か月前、猫は突然姿を消した。

「猫がいないの。起きてよ、ねえ」

突然起こされ、猫がいないと言われても、どうしていいかわからなかった。そもそも猫は、複数の家で餌をもらうなどして、したたかに生きていく動物ではないか。うちから消えたとしても不思議はないし、

いなくなっただけれどすぐに戻ってきた、という話も聞く。

「心配することないんじゃないか。どっかで元気にやってるだろ」

「なんでそんなことが言えるの？ 事故にでもあってたらどうするのよ」

そんなことを言い出したら、落ち着いて寝ることもできないし、自分の生活を送ることができなくなってしまう。

「大丈夫だよ、きつと」

もう一度眠りにつこうと寝返りを打った。

「寝ないでよ！ 一緒に探して！」

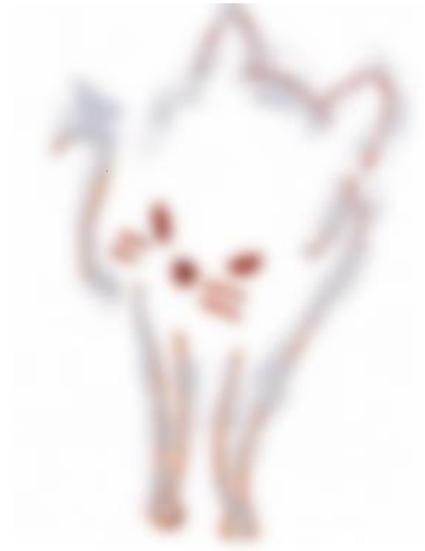
「大丈夫だって。頼む、もうちょっと寝かせてくれよ」

妻はしばらくのあいだ粘っていたが、ついにあきらめたのか、寝室を出ていった。

結局猫は見つからなかったのだが、それ以来、妻にあたられることが増えたように思う。田丸さんに問われるまますべて話したときも、猫のことを言われた。奥さん、猫ちゃんのことを根に持っていたん

じゃないですか、と。そのときはまさかと思ったけれど、いま思い出してみると、田丸さんの言うとお  
りかもしれなかった。

顔を上げると、猫が僕を見て「にゃあ」と鳴いた。感謝しているようでもあり、もつと何かよこせと  
言っているようでもある。僕は安心した。二か月前に妻がもらい受け、一か月前に姿を消した、あの猫  
に間違いなかったから。



#### 四

午後三時ごろになって、僕はスーパーへ出かけた。トイレの砂も替えたし、水も替えた。部屋を出たとき、猫はキャットタワーのいちばん上に寝そべっていた。一匹しかいない猫のためにキャットタワーなんてやりすぎだと思うけれど、妻が買ったのだし、猫について僕の発言権はなかった。

それにキャットタワーのことを知ったのは猫がいなくなったあとだ。届いた荷物を開けたらキャットタワーだったのだ。それで妻は、余計に不機嫌になったのかもしれない。でも、あれこれ考えても仕方がない。今の状況に対応するだけだ。

スーパーはまだそれほど込み合っていなかった。午後四時を回ると、パート勤務を終えたとおぼしき女性が多くなるので、彼女たちの間をすり抜けるのにも気を遣うが、この時間ならそこまでの注意は必要ない。セール品もまあまあ豊富だ。絶対に手に入れたいものは開店と同時に入らないと無理だけれど。いつものように、かごを持って売り場を回遊する。さて、今日の夕飯は何にするか……。

「山口さん？　山口さんじゃないですか」

名前を呼ばれ振り向くと、見覚えのない男性がニコニコして立っている。

「あの、失礼ですがどちら様でしょうか」

「私ですよ、川上です」

「川上さん？」

さて、どこの誰だろう。

「人違いじゃないですか。僕の知り合いに川上さんという方は……」

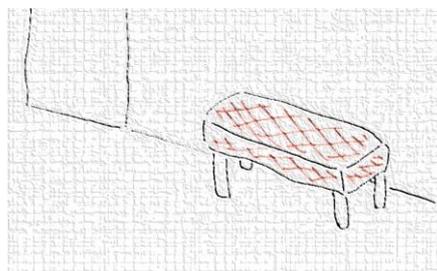
「無理もないか、病院で一度会ったきりですからね」

そう言って、男性は頭をかいた。

「病院、ですか？」

「ええ。山口さんは検査にいらしてましたよね。私は妻の不妊治療で」

不妊治療と聞いて思い出した。病院で心細い思いをしていたとき、隣にいた男性が声をかけてくれたのだった。



「ああ、あのときの……」

「よかった、思い出してくれましたか」

「ええ、すみません」

「いやいや、とんでもない。いきなり声をかけてすみませんでした。じゃあこれで」

川上と名乗った男性は頭を下げ、離れたところにいる家族に目をやると、今から行くという動作をした。

「あの」

男性が振り向く。

「もしよかったら、あの、お忙しくなければですけど、どこかでお話し、できませんか」

言いながら、自分は何を言っているんだろうと思った。そんなの迷惑だし、断られるにきまつてる。

案の定、男性は驚いていた。

「いいんですか、いや私からお誘いしようかと思ったくらいで、もちろんです。喜んで」

信じられなかった。今日は自分が自分ではない感じで、だから通りすがりの人とお茶をしようだなんて、

とんでもないことを考えるのだと思った。でも、まさかその申し出を受け入れてもらえるなんて。僕だけじゃなく、みんなどうかしているのかもしれない。

「妻には先に帰ってもらおうと言います」

川上さんは嬉しそうに言った。

「どこへ行きますか。あ、買い物の途中でしたか、すみません」

「ああ、いや」

そう言ってみたものの、買い物はしてしまったほうがいいだろう。

「配達してもらったらどうですか」

川上さんに言われ、このスーパーは配達してくれるんだと思い出した。

「受付はたしか、午後四時まででしたか」

「ええ、まだあと三十分はあります」

僕はうなずいて、買い物物を済ませることにした。

「じゃあ外で待ってますんで」

川上さんを見送って、インスタント味噌汁やカップラーメン、レトルト食品など、とりあえず日持ちしそうなものをかごに入れた。ペット関連用品もチェックする。トイレの砂は買い足したほうがいいのかもれない。餌もコンビニとは違うものがあつたので、いくつかかごに入れてみた。あいつは気に入ってくれるだろうか。

ふっと笑いがもれる。昨日まで家にこもりきりで何もする気力がなかったのに、あの猫がいるだけで、これほど行動的になるなんて。

ふと、妻もそうだったのかもしれないと思った。僕にとって今、あの猫が支えになっているように、妻も支えがほしかったのかもしれない。

僕では支えにならなかった。たとえそういう事情なのだと言われ説明されていても、支えになることはできなかつただろう。だから出ていく前の晩、あれほど子供をほしいと言いつ張ったのかもしれない。そう思ったら、なんだか気持ちやすうつと軽くなった。まるで、胸の中の重しが取れたかのように。

たぶん妻は、ずっとシグナルを発していたのだ。でも僕はまったく気づかなかった。いなくなる前に気づいていたら、今ごろは二人と一匹で、仲良く暮らしていたのだろうか？

妻がいなくなる前は、一人（妻）と一匹プラス僕だった。それがいくらか変化するだろうか。考えてみたがうまく思い浮かべられず、あきらめて買い物に戻る。

カウンターで配達を注文し、時間を午後六時以降としてもらった。まだ四時前だし、そこまで話が長引くとは思っていなかったが、妻とよく歩いた散歩コースを通って帰りがかった。ここからだと言回りなので、配達時間を遅くしなくてはならない。すべてを終え、スーパーの外へ出ると、川上さんが手を挙げて迎えてくれた。

「山口さん、申し訳ありません、お茶ができなくなりました」

「えっ」

「今日、実は元妻の誕生日で、行く約束してたのをさっき思い出したんです。本当に申し訳ない」

「元、奥さん……？」

「そうなんです。ああ、お会いしたときに不妊治療していたのが元妻で。あれが最後のチャンスだとい  
うんで付き合ってたんですが、結局子供はできませんでした」

「じゃあさっきの方たちは」

「元愛人と、その娘です」

とてもにこやかに、川上さんはそう言った。

「愛人……？」

「いやあ、驚きましたよ。自分に原因があって子供ができないんだと思っていたら、愛人のほうにでき  
ましてねえ。それを知った当時のカミさんが怒ったのなんのって」

「それはそうでしょうねえ」

「何より怒ったのが、自分に子供ができないことだというんです。絶対にできるはずだから付き合えと  
言われまして、何度か挑戦したんですがダメで、お会いしたときが最後でした」

「そうだったんですか……」

「山口さんは、その後どうですか。お子さんは？」

「いや、うちは——」

「あ、失礼しました、余計なことを」

「いえ、そんな」

「じゃあどうも、突然すみませんでした。この近くにお住まいなんですよね？」

「ええ、歩いて十五分くらいのマンションです」

「そうですか、ではまた次の機会にお茶でも。すみません、これで失礼します」

川上さんは一礼すると、携帯電話で話しながら足早に大通りへ歩いていった。あわてて後を追ったが、ちようどタクシーに乗り込むところで、去っていくタクシーに向かい、頭を下げるのが精一杯だった。仕方ない。またの機会にと言われたのだし、実際に機会があれば、いろいろ話すこともできるだろう。妻と歩いた散歩道から帰るつもりだったけれど、早く帰って、今の話を猫に聞かせたかった。猫にそんな話をしてどうするんだと思う反面、猫の顔を見て話すのが、今は何より楽しみだった。

## 五

「ただいま」

猫が体を起こす気配があった。

「調子はどうだ」

猫はケージにいたが、僕を見てすぐに背中を向けた。空腹が満たされたら、もうどうでもいいのかもしれない。

仕事を辞めてから、妻におかえりと言うことはあっても、ただいまと言ったのは数えるほどだった。「ただいま」

もう一度言ってみる。胸の奥がじんわりと熱くなった。ただいま、と小声で何度も繰り返す。そのたびに胸の奥から、熱いものがこみ上げてきた。

買ったものを整理したかったが、配達は一時間以上先だ。それで、聞いているかわからなかったけれど、さっきの話を猫に聞かせることにした。

「さつき買い物に行ったらさあ」

まるで妻に話しているようだった。僕が何かを言うといつも、なになに、と妻は興味を示す。あたかも妻が反応しているみたいに、話を進めることにした。

「誰に会ったと思う？ 僕もすっかり忘れてたんだよ」

（誰だろう？ わたしの知ってる人？）

「いや、知らない人だ。そもそも僕自身、忘れてたくらいだしね」

（もったいぶらないで教えてよ）

「わかった、教えるよ。僕が検査しに、病院へ行ったことがあっただろう」

（うん、何か月か前よね）

「そう。そこで心細い思いをしたのは言ったよね。でもそのとき、声をかけてくれた人がいたんだ。隣に座ってた、川上さんという人」

私は川上といいます、と川上さんは言った。検査ですか、私も受けましたよ。あいにく私に原因があ

るとわかりましたけどねえ、でも検査は重要です。なに、大したことありませんよ。大丈夫。笑顔でそう言われ、がちがちに緊張していた僕は肩の力を抜くことができた。結果としてあまり「大丈夫」とは思えなかったもので、言われるまで忘れていたのかもしれない。

「その川上さんがどうしたの」

「それがさ、今日スーパーでばったり会って——」

——え？

「スーパーって、ここから十五分くらいの、あの店？」

「……うん、そうだけど……」

……嘘だろ？

声の主を確かめるには、振り向かなくてはならなかった。でも体が動かない。そうだ、猫はどうして  
る？ 猫は——。

「にゃあ」

「ただいま！ お前、いつ戻ってきたの？」

すぐ隣で、猫を抱き上げている。

——落ち着け、落ち着くんのだ。

「電話したのに出てくれないんだもん。迎えにきてもらおうと思ったのに。だから帰ってきちゃった」  
おそるおそる、顔を隣に向ける。僕の前で笑顔を見せているのは、間違いなく妻だった。

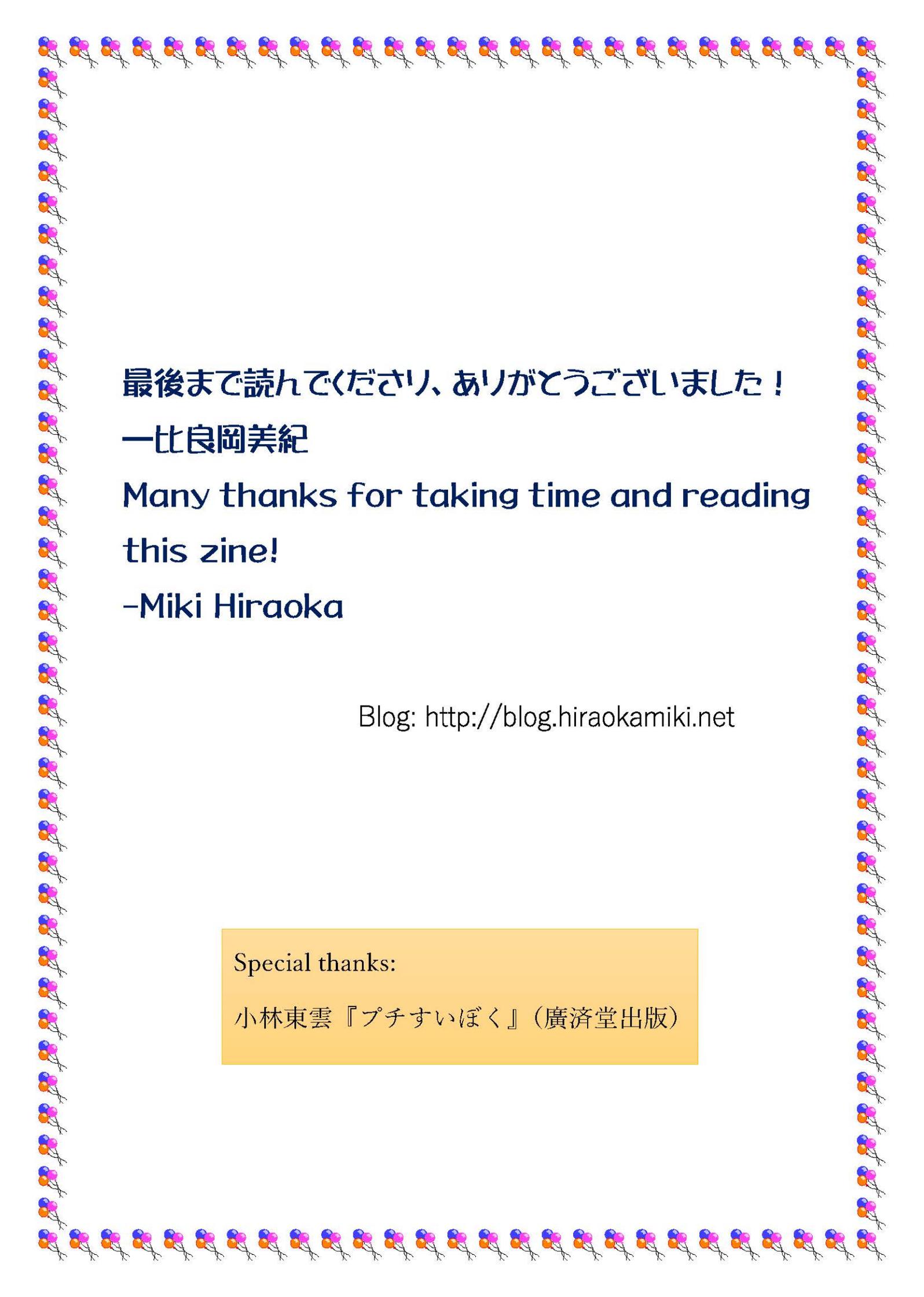
「ただいま」

言葉が出てこない。

「ごめんね、長いあいだ留守にしちゃって」

妻の顔が見えなくて目をこすったら、よけいに見えなくなって、何度も何度もこすったけど、やっぱりよく見えなかった。そんな僕を励ますように、妻に抱かれた猫が「にゃあ」と鳴いた。

おわり



最後まで読んでくださり、ありがとうございました！

一比良岡美紀

Many thanks for taking time and reading  
this zine!

-Miki Hiraoka

Blog: <http://blog.hiraokamiki.net>

Special thanks:

小林東雲『プチすいぼく』（廣濟堂出版）

